

# 現代日本語の同一動詞反復表現「VにV」について

野呂 健一

キーワード 同語反復、構文文法、形式と意味との慣習的結びつき、類像性、主体化

## 1. はじめに

本稿は、以下の例のように、同一文中で同じ動詞が繰り返される「VにV」という表現について考察する。

- (1) 母親は代わってあげられればと泣きに泣いた。  
(山本文緒『プラナリア』、p.29、文春文庫)
- (2) 私もついフラフラとーイヤ、フラフラどころか実にもう夜の日も寝ないで考えに考えたんだが、そのあげくにとうとう腹をきめて、本日のこのていたらくと相なった次第なんだよ。 (坂口安吾『裏切り』、青空文庫)
- (3) 私は、さっきから待ちに待っていたこの機会をすばやく捕えるが早いか、私の用件を切り出したのである。 (堀辰雄『窓』、青空文庫)

「VにV」について、国広（1997:281）は「動詞の強調形。長時間続いたり烈しい動きであることを表す」、グループ・ジャマシイ（1998:423）は、「同じ動詞を繰り返し、そこで述べられる動作や作用の程度が非常に激しいことを強調する」と記述している。つまり、同じ動詞の反復が、動作の継続や程度の激しさを表しているということであり、「VにV」全体の意味は、構成要素である動詞の反復形式の意味特徴を反映しているということになる。

しかし、一方で「VにV」は、3節で詳述するように、単なる程度の激しさではなく、これ以上のものがないほどの極端さを表すといった、構成要素からは厳密に予測できない意味特徴を持っている。このように、構成要素から合成的に解釈しても全体の意味を完全には得ることができないという点で、また、統語的にも、間に他の語句を挿入することができない、すなわち結びつきが固定しているという点で、「VにV」は一般的な慣用句と共通する。しかし、慣用句

は具体的な語の組み合わせが固定しているのに対して、<sup>1</sup>動詞の部分がある程度自由に入れ替えることができるという違いがあるため、「VにV」という形式を1つのパターンとして認める方が適当である。

本稿では、構文文法 (Fillmore, Kay and O'Connor 1988, Goldberg 1995等) からのアプローチを援用し、「VにV」を、形式と意味が慣習的に結びついた構文であると考え、「VにV」の構文としての意味を記述する。

## 2. 「VにV」についての先行研究

「VにV」という表現について、本稿と同様に構文文法の立場から分析した先行研究にOkamoto (1990, 1994) がある。Okamoto (1990) は、「VにV」について、統語論から意味論・語用論を切り離すモジュール文法によっては説明できないとする一方で、生産的に使用されるため純粋なイディオムとして扱うことはできないとし、構文文法によって最も適切に説明できると述べている。「VにV」の形態統語的特徴について、副詞句や名詞句の挿入を許さないことや、使役「(さ)せる」やテンスの接辞が、「VにV」全体に適用され、それぞれの動詞につくと容認度が下がることを根拠に、2つの独立した句から構成されるのではなく、複合動詞のような1つの統合体であると述べる。<sup>2</sup>

- (4) a. 昨日は山田と明け方まで飲みに飲んだ。  
 b. \*昨日は山田と飲みに明け方まで飲んだ。  
 c. 昨日は山田と思いきり明け方まで飲んだ。

(Okamoto 1990 : 249)

- (5) a. コーチは太郎を走りに走らせた。  
 b. ??コーチは太郎を走らせに走らせた。

(Okamoto 1990 : 250)

Okamoto (1990) は、「VにV」の意味を、「極端にVする」と記述し、構成要素の意味の総和から導くことができないと述べている。また、Okamoto (1994) では、動作や変化を表すとともに、動作や変化の限度を強調する表現であるとしている。同じ動作や変化が助詞「に」によって追加されることにより、動作や変化の程度が増加的であることを示しており、動詞の反復が、概念的増加を類比的に表すと述べる一方で、「限度」という意味は、動詞の反復や助詞「に」の字句通りの意味からは予測できないとしている。

- (6) 日本語はとにかくここ十年ほどで乱れに乱れてきたけれど、…  
 (7) 貧しかった頃はスカート一枚買うのにも、考えに考えた末にやっと店に向かった。  
 (以上2例 Okamoto 1994: 384)

「VにV」を構文文法のアプローチから考察している点や、動詞の反復という形式が動作や変化の増加を類像的に表すとしている点について、本稿も同じ立場である。本稿は、Okamoto (1990, 1994) で述べられなかった、「VにV」の意味特徴や現象について、さらに詳しく考察するものである。

### 3. 構文文法 (Construction Grammar) について

構文文法 (Construction Grammar) は、Fillmore, Kay and O'Connor (1988)、Goldberg (1995) などによって展開されてきた文法理論である。FillmoreらとGoldbergの間に、考察対象とする言語表現や分析方法に違いはあるが、<sup>3</sup>一般の統語規則と語彙知識からは説明できないような単位 (形式と意味の結びつき) を設定する必要があると考えている点では共通している。

「構文」という用語は伝統的には、「類似文の集合を統語の型から整理したりスト」であり、「記述的・学習的な便宜から、記憶・記録されるべき」(辻編 2002: 75 [吉村公宏氏執筆]) ものとして用いられてきた。

それに対して、構文文法は、言語を人間の認知活動の一部として捉える認知言語学の枠組から、構文を個々の語とは独立して存在する、意味と形式の対応物として捉え、形式が異なれば意味も異なるという「非同義性の原則」や、2つの構文が統語的な関連性を持つ場合、意味的にも関連があるという「動機づけ最大化の原則」を前提としている。

以下に、Goldberg (1995) による構文の定義を挙げる。

- (8) C is a CONSTRUCTION iff C is a form-meaning pair  $\langle F_i, S_i \rangle$  such that some aspect of  $F_i$  or some aspect of  $S_i$  is not strictly predictable from  $C$ 's component parts or from other previously established constructions. (Goldberg 1995: 4)  
 (Cが形式と意味のペア $\langle F_i, S_i \rangle$ であるときに $F_i$ のある側面あるいは $S_i$ のある側面が、Cの構成部分から、または既存の確立した構文から厳密には予測できない場合、かつその場合に限り、Cは一つの「構文」である。

(河上他訳2001: 5))

本稿では、Goldbergの定義に従い、構文を以下のように定義する。

- (9) 構文：部分から完全には予測できない特徴を持つ、形式と意味が慣習的に結びついた単位

以下に、FillmoreらやGoldbergが考察対象とした表現の例を挙げる。いずれも構成部分の意味の総和から全体の意味を厳密に予測することができないものである。<sup>4</sup>

- (10) He sneezed the napkin off the table.  
(彼はくしゃみをしてナプキンをテーブルから飛ばした。)
- (11) Frank dug his way out of the prison.  
(フランクは監獄の外へ掘り進んだ。)
- (以上2例：Goldberg 1995)
- (12) The more carefully you do your work, the easier it will get.  
(仕事は注意深くすればするほど、簡単になる。)
- (Fillmore, Kay and O'Connor 1988)
- (13) What is this scratch doing on the table?  
(どうしてテーブルにこんな傷がついているんだ。)
- (Kay and Fillmore 1999)

形式と意味との慣習的な結びつきとしての構文には、「足を洗う」「油を売る」のように語の組み合わせが固定している慣用句も含まれる。(10)~(13)のような表現や、本稿が取り上げる「VにV」は、語の組み合わせが固定していないという点で慣用句と異なるが、(10)の使役移動構文のように、構成要素の全てが入れ替え可能なものから、(13)のように一部が入れ替え可能なものまであり、<sup>5</sup>その違いは連続的なものである。

以下の分析において、「VにV」を構文、すなわち形式と意味との慣習的な結びつきとして捉え、構文としての意味を記述するとともに、「VにV」構文が持つ、統語的、意味的特徴について考察する。また、その際、認知言語学の枠組から主体化及び類像性という概念を援用する。<sup>6</sup>

#### 4. 「VにV」の統語的特徴

「VにV」の統語的特徴については、2節で述べたように、Okamoto (1990)

が詳細に記述している。ここでは、間に他の語句を挿入できないと特徴について取り上げる。

仮に、「VにV」が「Vに」とVから、統語規則に従って合成的に解釈することが可能であるならば、間に他の語句を挿入することができると仮定される。なぜなら、以下の例が示すように、一般的に修飾成分と被修飾成分の間には、ある程度自由に他の語句が挿入可能であるからである。

- (14) 鰻を食べに行く → 鰻を食べに浜松へ行く  
 (15) 家賃を集めに回る → 家賃を集めに一軒一軒回る

しかし、「VにV」の場合は、「Vに」と2番目のVの間に他の語句を挿入することができない。

- (16) \*昨日は山田と飲みに明け方まで飲んだ。(=(4b))  
 (17) 息せき切って歩きに歩いた。 → \*歩きに息せき切って歩いた。

初山(2002)が示すように、一般的な慣用句は、「VにV」と同様に、間に他の語句を挿入することができないという、いわゆる語結合の固定性という特徴を示す。

- (18) a. Aさんが我々のために一所懸命骨を折ってくれた。  
 b. \*Aさんが我々のために骨を一所懸命折ってくれた。

したがって、「VにV」は、一般的な慣用句と同様に、全体で1つのパターンとして固定した表現であると言える。

## 5. 「VにV」の意味的特徴

### 5.1 合成的解釈が不可能である理由

庵他(2001)は、「VにV」の助詞「に」を、以下の例のように、先に挙げたものに付け加えて後の要素を挙げたり、特定の取り合わせとして要素を挙げる並列助詞であるとしている。

- (19) 大根ににんじんに、えーと、それからトマトをもらおうかしら。

㉔ 「月に雁」とはよく言ったものだ。 (以上2例、庵他2001:58)

本稿も、庵(2001)が述べるように、「VにV」の「に」は並列助詞であると考える。しかし、2つの動詞と並列助詞「に」を合成的に解釈しても全体の意味にはならない。㉔は、「考える」に「考える」を付け加えるということになるが、「考えた」回数は2回だけであるとは考えにくく、相当回数あるいは相当時間にわたって考えたという解釈が適当であるからである。さらに、㉔は、「考える」ことに伴う程度が極端であることを表しており、このような意味特徴も、合成的解釈からは得られないものである。

㉕ 自分で考えに考えて出した結論を先生は尊重してくれなかった。  
(庵他2001:59)

## 5.2 時間的継続と程度・量の甚だしさ

部屋の中にいた人が窓からちょっと外を見たときに雨が降っていた場合、㉔aのように言うのは不自然であることから、「VにV」は単に程度が激しいことを表すのではないことが分かる。

- ㉔ a. ? (窓から外を見たら) 雨が降りに降っていた。  
b. (窓から外を見たら) 雨が激しく降っていた。

しかし、長時間にわたって事態が継続していても、程度の激しさを伴わなければ、「VにV」を用いることはできない。

- ㉔ a. \*この一週間、小雨が降りに降っている。  
b. この一週間、雨が降りに降っている。

次の例でも、「息せき切って」とあることから、単に長時間歩いただけでなく、程度の甚だしさを伴っていることが分かる。

- ㉔ a. ただわけもなくがむしゃらに歩いて行くのが、その子供を救い出さただ一つの手だてであるかのような気持ちがして、彼は息せき切って歩きに歩いた。(有島武郎『卑怯者』、青空文庫)  
b. \*彼はだらだらと歩きに歩いた。

また、グループ・ジャマシイ（1998）が「過去の文脈で用いられることが多い」と指摘するように、「VにV」で未来の事態を表すことはできない。

- ⑭ a. \*これから雨が降りに降るでしょう。  
 b. これから雨が激しく降るでしょう。

テイル形で用いられることもあるが、その場合、過去のある時点からの程度の激しさが継続していることを表す。⑭bのように現在を表す語句と共起すると不自然となる。

- ⑮ a. この一週間、雨が降りに降っている。  
 b. ?今、雨が降りに降っている。

ここで、「VにV」が過去のある時点からの継続を表す理由を考えてみる。例⑭のように、「VにV」と、動詞が1つの場合との違いは、言語記号と指示対象との間に類似性を認める類像性 (iconicity) の観点から説明可能である。動詞が1つの場合には、事態を1つのまとまりとして捉えるのに対し、「VにV」は継続する事態を1つのまとまりとして把握するのではなく、継続する事態を構成する、それぞれの事態ごとに焦点が当てられていると感じられる。そして、既の実現した事態の方が、話者が、1つ1つの事態に焦点を当てやすいため、未来や、現在の瞬間のみを述べる文で用いると不自然になる。<sup>7</sup>

- ⑯ a. あの人の母のところへ飛んできて、泣きに泣いたのを覚えています。(有吉佐和子『悪女について』、p.39、新潮文庫)  
 b. (省略)、激しく泣いたのを覚えています。

以上のことをまとめると、「VにV」は、事態に伴う程度の激しさと、その事態が過去のある時点から継続していることを表している。

次の例では、問題となるのは程度というより量であるが、やはり量の多さと過去のある時点からの時間的継続の両方を表している。

- ⑰ この本では、私がおよそ30年間にわたって、集めに集めたコレクションの数々をご披露します。

(<http://www.nenshousha.co.jp/mybooks/ISBN4-88978-066-1.htm>)

次の例では、時間的な長さだけが問題になっているように感じられるかもしれないが、この場合も、単に「待つ」時間の長さだけでなく、「待つ」ことに伴う期待感という程度の甚だしさを表している。

- (29) 観客が待ちに待って、待ちくたぶれそうになった時分に、しずしずと乗り出して、舞台の空気を思うさま動かさねばならぬのだ。(有島武郎『或る女』、青空文庫)
- (30) a. ?あてもなく待ちに待った。  
b. あてもなく待ち続けた。

「VにV」は単に程度が激しいことを強調するのではなく、それ以上のものがないほど極端な状態を表す表現である。(31)aと比べると(31)bが不自然に感じられる。

- (31) a. 時々休みながらも、一生懸命働いた。  
b. ?時々休みながらも、働きに働いた。

次の2つの文も同様に、強調の副詞を用いた(32)aの場合、それを上回る事物が存在するという文脈が後続しうるに対し、(32)bの場合には不自然になる。

- (32) a. 田中さんはすごく太っていたが、鈴木さんはもっと太っていた。  
b. ?田中さんは太りに太っていたが、鈴木さんはもっと太っていた。

### 5. 3 主体化との関わり

「VにV」が、時間的な長さを伴っていないと思われる例もある。

- (33) 主人公の曲がりに曲がった性格がとても面白かったです。  
(<http://www.amazon.co.jp/review/R3F90LRBTT92TA>)

話者は、主人公の性格が曲がっていく様子を長時間にわたって観察したわけではないであろう。主人公の性格を描写するのに、単に「曲がった性格」と言うのでは足りずに、「曲がりに曲がった」と言うことによって、これ以上のものがないほど極端に曲がった性格であることを表している。

- (34) 当時の平林さんは五十四歳くらいだったが、肥りに肥っていて、宿の浴



衣の前が合わない姿で、正座は出来ないとかであぐらを組んでいた。(瀬戸内寂聴『奇縁まんだら』、日本経済新聞)

この場合でも、話者は平林さんを見て、単に「肥っていて」というのを通り過ぎて、これ以上ないほど肥っていることを「肥りに肥っていて」と表現している。これらの例の場合、主体化 (subjectification) という概念 (Langacker 1990) が関わっていると考えられる。

- ③5 a. Vanessa walked across the road.  
b. Vanessa is sitting across the table from John.

③5aでは、主語の指示対象である Vanessa が通りの反対側へ実際に移動するのを、話者が観察しているのに対し、bでは Vanessa が実際に移動したわけではなく、話者が頭の中で John の位置から Vanessa の位置までの経路をスキャンニングしている。

空間的経路ではなく、時間的経路における主体化の例を挙げる。

- ③6 a. She is going to close the door.  
b. An earthquake is going to destroy that town.

③6aは、主語の指示対象が空間的経路を移動するという解釈のほかに、未来の事態を表すが、後者の場合、主語の指示対象が時間的経路を移動すると考えることができる。それに対して、③6bでは時間的経路をたどるのは話者だけであるという点で、③5bの例と同様であると考えることができる。

以上のことを、「VにV」の場合に当てはめて考えてみる。「VにV」が時間的継続を表す場合を図示すると図1のようになる。初めから程度や量の甚だしい状態が長時間にわたって継続する場合もあれば、時間の経過とともに程度や量が増す場合もあるが、いずれの場合も主語の指示対象が時間的経路をたどるのを話者が観察している。それに対して、③3や③4の場合、話者が頭の中で、主語の指示対象が「曲がりに曲がった」状態や「肥りに肥って」いる状態に達する時間的経路をスキャンニングしているのであり、図2のように示すことができる。

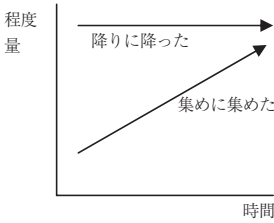


図 1

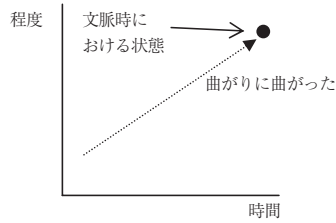


図 2

#### 5. 4 「VにV」に用いられない動詞

Okamoto (1990) は、「VにV」で用いることができない動詞として、サ変動詞及び「着く」「止まる」のような瞬間動詞を挙げている。

- (37) \*昨日は買い物しに買い物した。  
 (38) \*僕たちは頂上に着きに着いた。(以上 2 例 Okamoto 1990 : 256)

「VにV」にサ変動詞が用いられない事実については、庵他(2001)も言及している。サ変動詞の場合、次の例のように、名詞の部分を重ねる反復表現の存在が、サ変動詞全体を反復する表現が用いられない理由として挙げられる。

- (39) a. \*大学院時代は、研究しに研究した。(庵他2001 : 59)  
 b. 大学院時代は、研究に研究を重ねた。  
 (40) なんだかんだと買い物に買い物を重ね、気が付くと夜9時を過ぎていた。

次に、瞬間動詞の場合、意志動詞か無意志動詞かに関わらず、以下の例のように、「VにV」で用いられない動詞が多い。

- (41) \*とても疲れていたので、座りに座った。  
 (42) \*長い間取り組んできた仕事は、とうとう終わりに終った。

しかし、瞬間動詞であっても、複数の主体が次々と変化するという解釈が可能な場合は、「VにV」で用いることができる。この場合、事態の継続に伴う量が極端であることを表している。

- (43) 桜の花びらが散りに散った。
- (44) 花粉に悩むニッポン人の心配解消グッズとして売れに売れたのが、超立体マスク！  
(<http://www.tbs.co.jp/gacchiri/oa20051225n-5.html>)

このほか、状態動詞も、「VにV」で用いることができない。

- (45) a. \*時間と金がありにある。  
b. 時間と金がありあまっている。
- (46) \*高層マンションがそびえにそびえている。

### 5. 5 「VにV」の構文的意味

以上の考察により、「VにV」構文が持つ、以下のような意味的特徴が明らかとなった。

- (47) ①動詞の表す事態が、文脈が示す時点までの間、継続したことを表す。  
②事態に伴う程度や量が、極端であることを表す。

これらの特徴を踏まえ、「VにV」の構文的意味を、次のように記述する。

- (48) 「VにV」：長時間・期間にわたってVし続けた結果、程度・量が極端である

## 6. まとめ

本稿では、現代日本語の同一動詞反復表現のうち「VにV」という表現を取り上げ、構文文法（Construction Grammar）からのアプローチにより考察した。その結果、「VにV」の構文的意味、すなわち、この表現と慣習的に結びついた、構成要素の意味の総和から厳密には予測できない意味を、「長時間・期間にわたってVし続けた結果、程度・量が極端である」と記述した。

また、同一動詞の繰り返しという言語形式が事態の継続を表すことについて、類像性（iconicity）の現れであることを指摘したほか、(33)(34)のように主体化が関わっていると考えられる場合について考察した。

筆者は、野呂（2007）において、「NらしいN」「Nの中のN」「NというN」「N

またN]などの名詞の同語反復構文について、構成要素の意味から合成的に解釈することができない表現であることを指摘したが、本稿では、動詞の同語反復構文についても同様のアプローチにより考察することができることを示すことができた。

## 注

- 1 初山（2002：123）参照。たとえば、「仕事の途中で無駄話などをして怠ける」という意味を表すのに、「油を売る」とは言えても、「オイルを売る」「油を販売する」などと表現することはできない。
- 2 Okamoto（1990, 1994）において、例文はローマ字表記である。
- 3 Fillmoreらが、従来十分に扱われてこなかったイディオムのな言語事実を取りあげ、その内部構造を詳細に記述しようと試みたのに対し、Goldbergは動詞の項構造という文構造のいわば中核的な部分に着目し、1つの形式に結びつく複数の意味の関係や構文間関係をプロトタイプやメタファーといった認知言語学の概念を用いて捉えようとした。
- 4 例えば、(11)において、構成部分の意味の総和からもたらされるのは、「監獄の外に通じる道を掘った」というだけであるが、実際には、監獄の外へ出る道を通して移動したことを含意する。
- 5 Kay and Fillmore（1999）は、(13)のような表現を、What's X doing Y? 構文と呼び、疑問文でありながら状況に対する不満を述べる表現として分析している。What's X doing Y? 構文においては、XとYの部分が入れ替え可能である。

‘What's a nice girl like you doing in a place like this?’

（君のようなかわいい女の子が、どうしてこんなところにいるんだ。）

- 6 主体化とは、「客体的に把握されていたものが、客体性を徐々に失い、もともと内在していた主体的な把握しか残らなくなるような意味変化」のことである（辻編2002：104 [野村益寛氏執筆]）。

また、類像性とは、言語記号と指示対象が（ある程度まで）直接的な類似性をもつことをいう（塩谷2003：190）。例えば、He is very very very tall. は、He is tall. と言うよりも、彼はもっと背が高いことを示しているが、これは、形態の増加が内容の増加を表している（Lakoff and Johnson 1980）。

これらの概念は、構文文法において中心的なものではないが、構文文法を含む広い枠組である認知言語学を構成する諸概念の一部である。

7 「VにV」と同様に同一動詞反復表現である「VでもVでも」においても、既  
に実現した事態の継続・反復を表すのに用いられる。したがって、仮定条  
件で、「VでもVでも」を用いると不自然になる（野呂2008b）。

- (1) {いくら頑張っても／?頑張っても頑張っても}、上手くいかないだろ  
う。  
(2) 頑張っても頑張っても上手くいかなかった。

## 参考文献

- 庵功雄・高梨信乃・中西久美子・山田敏弘（2001）『中上級を教える人のための  
日本語文法ハンドブック』、スリーエーネットワーク
- 国広哲弥（1997）『理想の国語辞典』、大修館書店
- グループ・ジャマシイ（1998）『教師と学習者のための日本語文型辞典』、くろ  
しお出版
- 塩谷英一郎（2003）「第5章 認知から見た言語の構造と機能」、辻幸夫編『認  
知言語学への招待』pp.183-212、大修館書店
- 辻幸夫編（2002）『認知言語学キーワード事典』、研究社
- 野呂健一（2007）『現代日本語の同語反復表現について— Construction Grammar  
からのアプローチ—』、名古屋大学大学院国際言語文化研究科修士  
論文
- 野呂健一（2008 a）「動詞の反復表現「VにV」「VだけV」「VばVほど」につい  
て、日本語学会2008年度春季大会予稿集、pp.143-150.
- 野呂健一（2008 b）「日本語の動詞反復表現—「VでもVでも」「VにはV」を例  
として」、日本認知言語学会第9回大会CONFERENCE HANDBOOK,  
pp.101-104.
- 初山洋介（2002）『認知意味論のしくみ』、研究社
- Fillmore, C.J., Kay, P. and O'Connor, M.C.(1988)“Regularity and Idiomaticity in  
Grammatical Constructions: The Case of *let alone*”, *Language* 64(3),  
pp.501-538.
- Goldberg, A.E.(1995)*Constructions: A Construction Grammar Approach to  
Argument Structure*, University of Chicago Press. (河上誓作・早瀬尚  
子・谷口一美・堀田優子訳（2001）『構文文法論 英語構文への認  
知的アプローチ』、研究社)
- Kay, P. and Fillmore, C.J. (1999) “Grammatical Constructions and Linguistic

- Generalizations: the *What's X doing Y?* Construction” , *Language* 75(1), pp.1–33.
- Lakoff, G. and Johnson, M. (1980) *Metaphors We Live By*. University of Chicago Press. (渡部昇一・楠瀬淳三・下谷和幸訳 (1986) 『レトリックと人生』大修館書店)
- Langacker, R.W. (1990) *Concept, Image and Symbol: The Cognitive Basis of Grammar*, Mouton.
- Okamoto, Shigeko (1990) Reduplicated Verbs in Japanese as Grammatical Constructions, *BLS* 16, pp.248–256.
- Okamoto, Shigeko (1994) Augmentative verbal repetitive constructions in Japanese, *Cognitive Linguistics* 5–4, pp.381–404.

### 用例出典表記

青空文庫： <http://www.aozora.gr.jp>

[附記] 本稿は、日本語学会2008年度春季大会（於：日本大学）にて行った口頭発表の一部に多少の修正を加えたものである。